

IIAS 塾ジュニアセミナーテキスト  
(VOL. 02031)

未来に向かう人類の英知を探る  
ー 時代の裂け目の中で、人々は何に希望を見出してきたか ー

(思想・文学分野)

「本居宣長」に学ぶ  
～「もののあはれを知る」と「漢意」、  
その多義性と先駆性～

公益財団法人国際高等研究所  
IIAS 塾「ジュニアセミナー」開催委員会

本テキストは、2019年4月19日開催の第70回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所 I I A S 塾「ジュニアセミナー」開催委員会が編集・制作したものである。本テキストの無断転載・複写を禁じます。

※本テキストは、2024年夏季「IIAS 塾ジュニアセミナー」のメインテキストとして使用されたものである。

## 未来に向かう人類の英知を探る

－ 時代の裂け目の中で、人々は何に希望を見出してきたか －

# 「もののあはれ」こそ日本人の心性。 「漢意」に異を唱える「本居宣長」

本居宣長とは何者か。日本古典文学の研究を大成した先達であると同時に、実証的に日本の優位性を主張した初めての日本人でもある。前者は国文学者の顔であり、後者は思想家の顔である。宣長は二つの顔を持つヤヌス（双面神）であった。それゆえ、どちらか一方だけを見ると、その実像をとらえ損なってしまう。学者としての素晴らしい業績があるにもかかわらず、評論家は排他的な集団主義者と捉えて、「宣長問題」というレッテルを貼って神棚に上げてしまった。

そこで、ここでは宣長の書いた文章に即して、国文学者としてのプロフィールを「もののあはれを知る」説を通じてとらえ、思想家としてのプロフィールを「漢意」を通して考えてみたい。いずれも宣長学を考える上で必要不可欠なキーワードであるにもかかわらず、かならずしも正しい理解が行きわたっているわけではない。グローバル(国際化)が合言葉である21世紀こそ、宣長の提唱した「もののあはれを知る」説を正しく理解、運用し、排他的ではない「漢意」排斥の精神を習得する必要があるということを確認したい。

### 田中 康二 (Koji TANAKA)

1965年大阪市生まれ。神戸大学文学部卒業。

同大学院文化科学研究科文化構造専攻退学。博士(文学)。

富士フェニックス短期大学専任講師・助教授、神戸大学文学部助教授、同大学院人文学研究科教授を経て、2018年皇學館大学文学部教授。2001年第27回日本古典文学会賞(財団法人日本古典文学会)受賞。

著書に『村田春海の研究』『江戸派の研究』(以上、汲古書院)、『本居宣長の思考法』『本居宣長の大東亜戦争』『本居宣長の国文学』(以上、ペリカン社、宣長論三部作)、『国学史再考－のぞきからくり本居宣長』(新典社選書)、『本居宣長－文学と思想の巨人』『真淵と宣長－「松坂の一夜」の史実と真実』(以上、中央公論新社、宣長伝三部作)など。



## 目次

はじめに — 「国学」とは

### I 書籍年譜で辿る本居宣長の生涯

- (1) 思想家、宣長の人生
- (2) 奇跡の年、宝暦 13 年（宣長 34 歳）
  - 賀茂真淵との出会い、『紫文要領』の完成

### II 『紫文要領』で説かれた「もののあはれを知る」説 — 「心のシステム」を考究する

- (1) 儒仏批判 — 儒仏思想による物語評論を拒絶する
- (2) 物語論 — 文学はそれ自身の価値を至上とする
- (3) 恋愛論 — 恋愛によって人の心はよく進化する
- (4) 認識論 — 感情は頭脳による認識を経て起こる
- (5) 共感論 — 相手への思いやりが交流の道を開く

### III 『玉勝間』における「漢意」に対する論 — 「外国かぶれ」をすすぐ

- (1) 大和心を持って「漢籍」を読み、己が位置を知る
- (2) 「学問」によって己が国情を知る
- (3) 己が学問は「国学」でなく「学問」である
- (4) 「漢意」の影響を脱し、大和心を持って国際化に向かう

おわりに — 明日への指針となる宣長の思想

質疑応答

次代を拓く君たちへ — 田中康二からのメッセージ —  
良質な知性に触れて未来を見通す眼を養おう

#### 【参考資料】

- 資料 1 本居宣長主要書作年譜 および『論語』
- 資料 2 本居宣長『紫文要領』
- 資料 3 本居宣長『玉勝間』

2019（平成 31）年 4 月 19 日開催

第 70 回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：「もののあはれ」こそ日本人の心性。「漢意」に異を唱える「本居宣長」

講演者：田中 康二（皇學館大学文学部教授）

## はじめに — 「国学」とは

本テキストのキーワードである「国学」とは、江戸時代中期から後期にかけて発達した古典研究の一派、またはその学問である。契沖を祖とし、荷田春満（かだのあずままる）、賀茂真淵を経て本居宣長にいたって完成され、平田篤胤らに引継がれた。儒教、仏教渡来以前の、日本固有の精神、文化を明らかにすることを主たる目的とする。そのため、神道、国史、歌学、語学、有職故実などの諸領域にわたる研究も、単に個別的に扱うというよりは総合的な古代文化学として扱う態度が著しい。方法の点では、実証的な文献学的方法に特色がある。国学は学問、研究の範囲内にとどまらず実践とも結びつき、古言、古意による文学活動などを伴ったが、ことに篤胤にいたって復古思想が強調され、尊王攘夷運動の思想的根拠となった。（出典：ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典）

## I 書籍年譜で辿る本居宣長の生涯

### （1）思想家、宣長の人生

『本居宣長主要著作年譜』（巻末の「資料 1」（p.24～25）参照）

出典：吉川幸次郎・佐竹昭広・日野龍夫編

『日本思想大系』四十巻『本居宣長』岩波書店（1978 年）の付録

#### ①「模索の日々」

最初は 20 歳までをまとめている。特に 10 代を中心に「模索の日々」としている。宣長は元々松坂の商家の生まれで、商家を継ぐべく 10 代は他家の商家に丁稚奉公に出されていたので、人生を模索していた時代と位置付けられる。

#### ②「学問の出発」

20 代から本格的に学問を始める「学問の出発」の時期である。

#### ③「人生の転機」

30 代が「人生の転機」となる。宣長は 70 歳代で亡くなっているので、折り返しの時期が 30 代である。まさに人生の転機がやってくる。



本居宣長旧居「鈴屋」（国特別史跡）

出典：本居宣長資料館

#### ④「自省の歲月」

40代は「自省の歲月」で、自らを振り返る時期である。自らとは宣長自身のことでもあるが、日本を振り返るという意味でもある。本居宣長にとって国とは、松坂を含む伊勢の国という枠組みに留まらず、日本国という大きな枠組みでものを考えていた。したがって、日本国をも振り返るような思索を深めていく時期である。

#### ⑤「論争の季節」

50代は「論争の季節」とした。宣長は生涯多くの論争を繰り広げており、その中でも50代は後世に残る重要な論争をしている。

#### ⑥「学問の完成」

60代は最も多くの著作を執筆し、出版している、まさに「学問の完成」の時期と言える。

#### ⑦「鈴屋の行方」

72歳で亡くなったので70代は実質2年ほどだが、その後の宣長の門弟たちも含めて「鈴屋の行方」として捉えている。

### (2) 奇跡の年、宝暦13年(宣長34歳)

#### — 賀茂真淵との出会い、『紫文要領』の完成

宣長にとってはまさに人生の転換期という時期が確実にあった。それは宣長34歳、1763(宝暦13)年のことである。この年『紫文要領』を書いている。宣長にとって一生忘れられない奇跡の年となった。

2月に実子「春庭」が誕生する。子どもの誕生は親にとって画期的なことだが、学者宣長としてもこの年は画期的な年となった。本居春庭は後天的全盲であったが、若い時から宣長の薫陶を受けて国語学の業績を残すことになる。宣長の後を継いで宣長の学を発展させ、中学・高校の文法で習う「○行○段活用」を最初に始める等、国語学の活用研究に重要な実績を残している。その春庭が誕生したのが1763(宝暦13)年2月であった。

5月には「松坂の一夜」があった。これは一生の師匠と仰ぐ賀茂真淵と出会い、『古事記』の研究がいかに大切であるかという教えを受け、30有余年の歳月を経て『古事記伝』という最初にして最大の『古事記』の注釈書、研究書を完成させるに至る。



深澤清の描いた「松坂の一夜」

出典：本居宣長記念館

6月には『紫文要領』を書き上げる。『紫文』の「紫」は紫式部、「文」は式部が書いた文を意味することから『源氏物語』を指

しており、『紫文要領』は『源氏物語』の評論、研究という重要で画期的な業績となる。中でも重要なのが「もののあはれを知る」説である。

そして、12月頃までには『石上私淑言』の執筆を終える。これは歌論だが、「もののあ

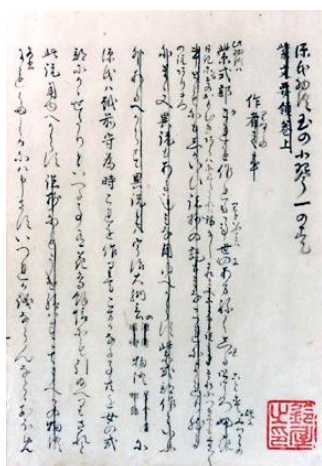
はれを知る」説を歌論に応用したものと言える。このように 1763(宝暦 13)年、宣長 34 歳の年は後世に残る業績を発表したり、師匠となる人と出会い、志を立てたり、遡って実子春庭が生まれたり、出来事の多い、まさに奇跡の年だったのである。

この奇跡の年に執筆した『紫文要領』については、原文に即して詳しく考えていく。

## 【補足】 『論語』と宣長の人生の対比（巻末の「資料 1」の末尾 (p.24) 参照)

本居宣長は儒学、朱子学等の中国の学問を終生批判し続け、攻撃の対象としていたが、その始祖と言われる孔子については高く仰いで「くじ(孔子)はよきひと」で終わる歌を詠むほど尊敬していた。孔子は宣長と同じく 70 歳余りまで生きていたので、有名な「子曰、吾十有五而志于学」から始まる一番短い自叙伝と言われる『論語』と宣長の人生がパラレルにシンクロするような印象がある。10 年ごとの区切りで、宣長と孔子の人生を比べるのも一興である。

## II 『紫文要領』で説かれた「もののあはれを知る」説 — 「心のシステム」を考究する



『紫文要領』  
出典：本居宣長記念館

『紫文要領』は前述のように『源氏物語』の注釈書、研究書、評論である。この中で宣長は、紫式部が『源氏物語』を執筆するに当たっての作意、意図を見事に言い当てている。一言で言うと「もののあはれを知る」説である。「もののあはれ」説や「もののあはれ」論ではなく、敢えて「～を知る」と付け加えたところが重要な点である。

(巻末の「資料 2」(p.26~27) 参照)

### (1) 儒仏批判 — 儒仏思想による物語評論を拒絶する

此物語の大意、古来の諸抄にさまざまの説あれ共、式部が本意にかなひがたし。凡此物語を論ずるに、異国の儒仏の書をもて、かれこれいふはあたらず事也。異国の書とは大きに類のことなるもの也。自然に義理の符合する事はあれ共、それはそれ也。何の書によりてかく、かの文にならひて作るなどいふ事、みなあたらず。式部が意にたがへり。まへにもいへるごとく、我国には物語といふ一体の書有て、他の儒仏百家の書とは、又全体類のことなる物也。

(本居宣長『紫文要領』)

### 【解】

『源氏物語』は時代によって、「善因善果、悪因悪果」と言われるように前世の報いで現世があるとして、現世で良いことをすれば来世で良いことが起こり、現世で悪いことをすれば来世でその報いを受けるという「因果応報の理」という仏教の思想や、あるいは「勸善懲悪」という善行を勧め、悪人を懲らしめるような儒教の思想で評論されてきた。特に江戸時代は儒教全盛の世の中だったので、その思想に基づいて評論されたわけだが、宣長にとって仏教や儒教の思想は外国の思想であり、それによって日本の物語を評論するのは認め難いと最初に主張している。

### (2) 物語論 —文学はそれ自身の価値を至上とする

さてその物語といふ物は、いかなる事をかきて、何のためにみる物ぞといふに、世にありとあるよき事あしき事、めづらしき事おもしろきこと、おかしき事あはれなることのさまさまを、しどけなく女もじにかきて、その絵をかきまじへなどして、つれづれのなぐさめによみ、又は心のむすぼゝれて物思はしきときのまぎらはしなどにするもの也。その中に歌のおほき事は国の風にして、心をのぶるものなれば、歌によりてその事の心も深く聞え、今一きは哀とみゆるものなれば也。

(本居宣長『紫文要領』)

### 【解】

この中に「つれづれのなぐさめ」という言葉が出てくるが、これは今で言うところの暇つぶしである。要するに、物語は暇つぶしに過ぎない、あるいは「心のむすぼゝれて物思はしきときのまぎらはし」として、嫌なことがあって鬱屈した気持ちを解きほぐす＝「心を晴らす」ためにあるものだと言っている。つまり、儒教の教えや仏教の理、あるいは政治や道徳のために物語はあるのではなく、単なる暇つぶしだと言っているわけである。

これは謙遜している、卑下していると読めてしまうところもあるが、実はそうではなくて、むしろ積極的に文学作品は宗教や政治、道徳などから独立し、自立して存在することができるものだと言っている。文学至上主義、今なら芸術至上主義のようなことを宣長は言おうとしている。

### (3) 恋愛論 —恋愛によって人の心はよく進化する

さていづれの物語にも、男女のなからひの事のみおほきは、集共に恋の歌のおほきとおなじことにて、人の情の深くかゝること、恋にまさることなき故也。

(本居宣長『紫文要領』)

### 【解】

物語の中に恋愛の記述、特に男女の恋の贈答歌が多いのは歌集の中に「恋」の部があつて最も詠まれる歌が多いことと同じであつて、人情(後に「もののあはれ」と言い換える)、つまり人の情けが最も深く表現されるのが恋であり、恋愛を通して人の心は進化していくと宣長は言っている。したがって、『源氏物語』の本質は恋愛を扱っていることにあると



いうことで、これは江戸時代のように堅い儒教で人民を支配する時代にあつては稀有な考え方であった。

#### (4) 認識論 —感情は頭脳により認識を経て起こる

##### (その1)

大よそ此物語五十四帖は、物のあはれをしるといふ一言にてつきぬべし。

(本居宣長『紫文要領』)

##### (その2)

その物の哀といふ事の味は、右にも段々いふごとく也。猶くはしくいはゞ、世中にありとしある事のさまさまを、目に見るにつけ耳にきくにつけ、身にふるゝにつけて、其よろづの事を心にあぢはへて、そのよろづの事の心をわが心にわきまへしる、是事の心をしる也、物の心をしる也、物の哀をしる也。其中にも猶くはしくわけていはゞ、わきまへしる所は、物の心事の心をしるといふもの也。わきまへしりて、其しなにしたがひて感ずる所が物のあはれ也。

(本居宣長『紫文要領』)

##### (その3)

たとへばいみじくめでたき桜の盛にさきたるを見て、めでたき花と見るは物の心を知る也。めでたき花といふ事をわきまへしりて、さてさてめでたき花かなと思ふが感ずる也。是即物の哀也。然るにいかほどめでたき花を見てもめでたき花と思はぬは、物の心しらぬ也。さやうの人ぞ、ましてめでたき花かなと感ずる事はなき也。是物の哀しらぬ也。

(本居宣長『紫文要領』)

#### 【解】

##### (その1)

要するに、『源氏物語』は「もののあはれを知る」ことが主題であると宣長ははっきりと述べている。「もののあはれを知る」という一言でこのテーマは言い果せてしまうということである。

##### (その2)

抽象的な言い方をしているが、物事の本質、事柄の本質を捉えることが「もののあはれを知る」ことだと言っている。宣長の巧みなところは、次にあるように「たとへば～」として本来は抽象的で難しい事柄を絶妙な比喻、例示で分かりやすく説明している点にある。

##### (その3)

これを「認識論」としているが、これが先ほど「もののあはれを知る」が重要と言った点である。ここで宣長は「もののあはれ」というのは一言で言うと感情や感動という情に関するところ、つまり感性に関する心の動きだが、そこには必ず知性、さらに言えば認識、認知、理解という頭の働きがあると述べている。そして、例として「桜の花をなぜ美しいと思うのか」という認識のメカニズムを分かりやすく紹介している。まず、桜の盛りに盛んに咲いているのを見て目で知覚する。あるいは、鳥のさえずりであれば耳で聞く＝聴覚、

梅の花であれば香りを鼻で匂う＝嗅覚というように五感によって認識する、五感による知覚を通ることになる。それから「めでたき花と見るは物の心を知る也。めでたき花といふ事をわきまへしりて」と続くが、「わきまへしる」とは理解、認識、認知と表現できるので、目、口、鼻、耳の感覚で捉えられたものが頭脳を通して理解され、認知され、認識されるということである。そして、知的な部分を通して初めて「さてさてめでたき花かなと思ふが感ずる也」と感動する、つまり感性の部分に働きかけることになる。

要するに「桜が美しい」と思うのは、まず目で見て、頭で認識して、そして心で感じ、感動するので、知覚→認識→感動というメカニズムによって知ることができると言っているわけである。そして、これを「もののあはれを知る」説と言っている。したがって「知る」という言葉は非常に大事なものである。宣長によれば、反射的に花を見て「美しい」と思うのではなく、必ずその美しい花があることを認識する頭のメカニズムを通して初めてそれが感動に結びつくわけであり、このように認識のメカニズムを分かりやすく解明し、それを「もののあはれを知る」と名付けたのは、世界的にも先駆けとなっている。

例えば、認知心理学には情動の中枢起源説がある。これは提唱者の名前をとってキャンノン＝バード説と言われるが、「楽しいから笑うのか」「笑うから楽しいという感情が起きるのか」、つまり情動は中枢で認識されるという説と、情動は抹消で引き起るといふ情動の抹消起源説の二つの説で論争があった中で、キャンノン、バードという 2 人の学者が情動＝感情はまず頭脳＝中枢で認識されると主張したものである。これが 20 世紀初頭の 1927（昭和 2）年のことであり、それよりも 150 年も前に宣長は「もののあはれを知る」説を提唱し、情動＝感動は必ず知性的な部位、つまり頭の認識というメカニズムを通して生まれ、湧き起こることを証明している。これは日本として世界に誇るべきである。

#### （5）共感論 —相手への思いやりが交流の道を開く。

又人のおもきうれへにあひて、いたくかなしむを見聞て、さこそかなしからめとをしはかるは、かなしかるべき事をしるゆへ也。是事の心をしる也。そのかなしかるべき事の心をしりて、さこそかなしからむと、わが心にもをしはかりて感ずるが物の哀也。そのかなしかるべきいはれをしるときは、感ぜじと思ひけちても、自然としのびがたき心有て、いや共感せねばならぬやうになる、是人情也。物の哀しらぬ人は何共思はず。其かなしかるべき事の心をわきまへぬ故に、いか程人のかなしむを見ても聞ても、わが心にはすこしもあづからぬ故に、さこそと感ずる心なし。是等はたゞ二ッをあぐる也。是に准じて、よろづの事の物の哀といふ事を知べし。  
(本居宣長『紫文要領』)

#### 【解】

「もののあはれを知る」説の最後に「共感論」を挙げている。日本では、今でも昭和、平成、令和という元号が使われている。現在、世界で国家として年号を使っているのは日本だけと言っても過言ではない。そのように日本には固有のものがあり、また島国でもあるので、国際化が遅れたとか、グローバル化に乗り遅れていると言われるところがあるが、実は「もののあはれを知る」説はそういう国際化、グローバル化に十分耐え得る懐の深い

アイデアを提供していることが『紫文要領』には書かれている。

「人のおもきうれへにあひて」というのは、「うれへ」を不幸、あるいは病気と言い換えると、他人が不幸や病気によって大層悲しむことであり、身内の不幸を想像するのが一番分かりやすい例で、それを見て「さぞ悲しいことだろう」と推し量ることが「もののあはれを知る」ことの重要な要素であると言っている。悲しいはずの出来事がなぜ悲しいのかということを知った上でその人に寄り添う、これを「共感」と言うが、思いやりや人情も同様である。最近は良くないような意味に使われる「付度」も、相手の思いを推し量って相手が口に出す前にこちらからしてあげることで、実は共感や思いやりと同じである。文学作品を読むという点では「感情移入」という言い方もある。登場人物の気持ちに寄り添って、登場人物に悲しい出来事があると思わず涙がこぼれてしまう等、そういうことも「もののあはれを知る」ことと表現されている。

実はこのように共感、思いやり、付度等の事柄は、国際化する社会の中では重要である。そもそも言葉が通じない外国の人との心のやり取りは「もののあはれを知る」こと、つまり感情移入や共感、思いやり、同情＝シンパシー等が重要になる。そのような他者に対する配慮を宣長は「もののあはれを知る」という事柄で言い表している。

元々『紫文要領』は源氏物語の評論という形で始まっているが、人の心の動きのメカニズムを詳しく追求していく中で、日本人特有の心の使い方の本質を言い当てるところにまで至っている。これは現在、国際化、グローバル化が進む世界の中で誇るべき日本人の感情のメカニズムである。250年前の宣長が『源氏物語』を出発点としながら、このような分析をしたことは誇るべきことである。

### Ⅲ 『玉勝間』における「漢意」に対する論

#### —「外国かぶれ」をすすぐ



『玉勝間』  
出典：本居宣長記念館

もう一つの課題は「漢意」である。宣長の「漢意」に対する論は、外国のものや外国人を攻撃し、排斥するように思われがちだが、実は「漢意」に対する攻撃は分かりやすく言うと「外国かぶれ」に対するものである。江戸時代にあっては外国とは中国のことであり、中国のことを研究している儒学者や朱子学者たちは「日本よりも中国の方が文化的にも進んでいるし、道徳的にも素晴らしい」と、日本を蔑んでいた。藤原惺窩が「日本人に生まれたことを悲しく思う」と書いたように、

そう思っている儒学者がいたのである。

そのように、日本人であるにも関わらず中国を一番良い国だと思う人たちがおり、宣長はそれを「漢意」として排斥する。ただ「あれは外国にかぶれているだけだ」と批判することが「漢意」排斥であって、決して外国人や外国の思想、文化を批判したり、今風の言葉で言えばディスったりしているわけではない。つまり、「漢意」排斥の対象は日本の儒学者や漢学者であり、中国人や中国の精神ではないのである。その点を混同すると、宣長自身が孔子を尊敬していたことに矛盾を生じる。まずは「漢意」＝外国かぶれと理解するとよい。

1794（寛政6）年、宣長は65歳の最も脂の乗り切った、執筆活動と出版活動に勤しんでいた時期に『玉勝間』という随筆を書いて出版した。その中から巻一の22項目～25項目までの「漢意」の説明をした文章を紹介する。（巻末の「資料3」（p.28～29）参照）

#### （1）大和心を持って「漢籍」を読み、己が位置を知る

もろこしぶみをもよむべき事

（本居宣長『玉勝間』巻一 22）

から國の書をも、いとまのひまには、ずみぶんに見るぞよき、漢籍も見ざれば、其外つ國のふりのあしき事もしられず、又古書はみな漢文もて書たれば、かの國ぶりの文もしらでは、學問もことゆきがたければ也、かの國ぶりの、よろづにあしきことをよくさとりて、皇國だましひだにつよくして、うごかざれば、よるひるからぶみを見ても、心はまよふことなし、然れども、かの國ぶりとして、人の心さかしく、何事をも理をつくしたるやうに、こまかに論ひ、よさまに説なせる故に、それを見れば、かしこき人も、おのづから心うつりやすく、まどひやすきならひなれば、から書見むには、つねに此ことをわするまじきなり、

#### 【解】

要は漢籍も読まなければならないという話である。暇のある時に漢籍をきちんと読むことは良いことであり、漢籍を読まなければ外国の風習が悪いということも知ることができない。そもそも日本の古い文章は漢文で書かれているので漢籍の漢文体を知らなければ、日本の学問も深く理解することができない。したがって、漢籍を読むべきだと言っているのである。

この中に「皇國だましひ」という言葉がある。現代の日本人には聞き慣れない言葉だと思われるが、宣長自身もよく使う言葉で「大和魂」あるいは「大和心」を意味している。これは日本人固有の心で、宣長はそれが固まってさえいけばいくら漢籍を読んでも外国かぶれになることはないと言っている。つまり、日本人固有の「皇國だましひ」＝大和心をしっかり持って漢籍を読み、自分の位置を確かめようということである。

## (2) 「学問」によって己が国情を知る

学問して道をしる事

(本居宣長『玉勝間』巻一 23)

がくもんして道をしらむとならば、まづ漢意をきよくのぞきさるべし、から意の清くのぞこらぬほどは、いかに古書をよみても考へても、古への意はしりがたく、古へのこゝろをしらでは、道はしりがたきわざになむ有ける、そも／＼道は、もと學問をして知ることにはあらず、生れながらの眞心なるぞ、道には有ける、眞心とは、よくもあしくも、うまれつきたるまゝの心をいふ、然るに後の世の人は、おしなべてかの漢意にのみうつりて、眞心をばうしなひはてたれば、今は學問せざれば、道をえしらざるにこそあれ、

### 【解】

「がくもんして道をしらむとならば、まづ漢意をきよくのぞきさるべし」とは、日本のことを知るために学問をする、道を知るためには漢意を除かなければならないということ、要するに外国かぶれ、中国かぶれの心を除かなければならないと言っている。

では、宣長にとって学問とは何かというと、現代で言うところの国学、日本学と言ってもよいが、それについて次の項目で「がくもん」と題して解説している。

## (3) 己が学問は「国学」でなく「学問」である

### (その1)

がくもん

(本居宣長『玉勝間』巻一 24)

世の中に學問といふは、からぶみまなびの事にて、皇國の古へをまなぶをば、分て神學倭學國學などいふなるは、例のから國をむねとして、御國をかたはらになせるいひざまにて、いといとあるまじきことなれ共、いにしへはたゞから書學びのみこそ有けれ、御國の學びとては、もはらとする者はなかりしかば、おのづから然いひならふべき勢ひ也、

### (その2)

しかはあれども、近き世となりては、皇國のもはらとするともがらもおほかれれば、からぶみ學びをば、分て漢學儒學といひて、此皇國のをこそ、うけはりてたゞに學問とはいふべきなれ、

### (その3)

佛學なども、他よりは分て佛學といへども、法師のともは、それをなむたゞに學問とはいひて、佛學とはいはざる、これ然るべきことわり也、國學といへば、尊ぶかたにもとりなざるべけれど、國の字も事にこそよれ、なほうけばらぬいひざまなり、世の人の物いひざま、すべてかゝる詞に、内外のわきまへをしらず、外つ國を内になしたる言のみ常に多かるは、からぶみをのみよみなれたるからの、ひがことなりかし、

### 【解】

#### (その1)

この「がくもん」については「国学？」と付記した(巻末の「資料3」(p.28~29)参照)。その理由は、現在どの教科書も本も本居宣長を国学者であつて国学を大成した人物

としているが、宣長自身は自らの学問を「国学」と名付けられることを嫌がっていたからである。

江戸時代に学問と言えば、一般的に儒学、漢学を指しており、日本の学問のことを神学や和学、国学と呼んでいた。しかし、宣長はその呼び方は中国を中心として考えているだけであり、本来は日本の国学(便宜上、国学と言う)は単に「学問」と言えばよい、なぜ「学問」と言わないのかという憤りを述べている。

(その2)

したがって、中国の学問は漢学や儒学と呼んで、わが国の学問は単に「学問」と呼べばよいと主張している。その議論は以下でも面白く展開している。

(その3)

佛學とは仏教学のことであり、仏教学を極めた法師は自分たちの学問、つまり仏教学を単に「学問」と言って「仏学」と言わない。それと同じように、自分の学問は単に「学問」と言えさえすればよいわけであり、単に中国を中心に考えるから漢学、儒学を「学問」と言い、それと分けるために神学、和学、国学と言うのは違うと言っている。宣長は後世からは国学者と言われ、宣長が極めた学問を国学と我々は一般に呼んでいるが、宣長に言わせれば、それは良くないことなのである。

(4)「漢意」の影響を脱し、大和心を持って国際化に向かう

からごゝろ

(本居宣長『玉勝間』巻一 25)

漢意とは、漢國のふりを好み、かの國をたふとぶのみをいふにあらず、大かた世の人の、萬の事の善惡是非を論ひ、物の理りをさだめいふたぐひ、すべてみな漢籍の趣なるをいふ也、さるはからぶみをよみたる人のみ、然るにはあらず、書といふ物一つも見たることなき者までも、同じこと也、そもからぶみをよまぬ人は、さる心にはあるまじきわざなれども、何わざも漢國をよしとして、かれをまねぶ世のならひ、千年にもあまりぬれば、おのづからその意世の中にゆきわたりて、人の心の底にそみつきて、つねの地となれる故に、我はからごゝろもたらずと思ひ、これはから意にあらず、當然理也と思ふことも、なほ漢意をはなれがたきならひぞかし、そもそも人の心は、皇國も外つ國も、ことなることなく、善惡是非に二つなければ、別に漢意といふこと、あるべくもあらずと思ふは、一わたりさることのやうなれど、然思ふもやがてからごゝろなれば、とにかくに此意は、のぞこりがたき物になむ有ける、人の心の、いづれの國もことなることなきは、本のまごゝろこそあれ、からぶみにいへるおもむきは、皆かの國人のこちたきさかしら心もて、いつはりかざりたる事のみ多ければ、眞心にあらず、かれが是とする事、實の是にはあらず、非とすること、まことの非にあらざるたぐひもおほかれれば、善惡是非に二つなしともいふべからず、又當然之理とおもひとりたるすぢも、漢意の當然之理にこそあれ、實の當然之理にはあらざること多し、大かたこれらの事、古き書の趣をよくえて、漢意といふ物をさとりぬれば、おのづからいとよく分るゝを、おしなべて世の人の心の地、みなから意なるがゆゑに、それをはなれて、さとることの、いとかたきぞかし、

## 【解】

最初の「漢意とは、漢國のふりを好み、かの國をたふとぶ」というのは、前述の外国かぶれ、中国かぶれということだが、宣長はさらに進んで「漢意」は中国かぶれだけを言っているわけではなく、善悪是非(よさあしき)を定めるような物の考え方、思考法も「漢意」だと言っている。つまり、漢籍を一文字も読んだことのない当時の日本人も、実は「漢意」に侵されているということで、千年余りも中国から文化的影響を受けてきたために、「自分は漢籍の影響を受けていない」「儒学や朱子学の影響を受けていない」と思っているものの考え方自体が中国式の善悪是非をあげつらうような思考法になってしまっていると言っているわけである。そのように、漢籍を一文字も読んだことのない人も「漢意」に侵されているので、まずは自ら省みて、自分のものの考え方が果たして日本的なものであるかどうかということを確認して始めることが大切であると宣長は言っている。

では自らの根本にある日本人特有のものの考え方、古来からのものの考え方とは何かというと「皇國だましい」＝大和魂、あるいは大和心というもので、それが日本固有の考え方なので、まずは大和心を持って、大和心との関係の中で漢籍、漢学、儒学を見て行くと正しい判断にたどり着くのではないかという提言を宣長はしているのである。

この「外国かぶれ」をまず自分の心の中からすすぎ去ることは、まさに国際化、グローバル化の中で重要である。単に「外国にかぶれるな」と言っているのではなく、例えば外国に行った時、まずは日本のことを知った上で相手との交流が始まる。逆のことは外国から日本に来る留学生にも言える。皇學館大學にも中国から留学生が日本のことを学ぶために来ている人が、中国人だから漢籍が読めるとは限らない。それほど現代の中国語と、文言と言われる漢文とは全く異なる。

それでも、我々は古典、古文を読むことを習って日本の昔のことも知り、そこから初めて日本と外国との関係を相対化して見ることができる。自国のことをあまり知らない留学生には、日本に留学してきたので日本のことを学ぶのは重要だが、同時に自国のこともきちんと勉強して、その関係の中で日本のことを学んでいただきたい。宣長が言っているのはまさにそういうことである。国際化と逆行する考え方ではなく、むしろ前述の「もののあはれを知る」説が思いやりや共感を含む懐の深い考え方であることを含めて、漢意排斥は外国のもの、外国の文化を忌み嫌うような印象に捉えられがちだが、外国かぶれという言葉でその真意を理解した上で、より深くは宣長の言葉に沿って理解することが重要である。

## おわりに ー明日への指針となる宣長の思想

宣長自身は「国学者」と呼ばれるのは不本意だと思われるが、国学者は国粹主義やナショナリストと見られがちである。実際にそういう局面がないわけでもなくて、先の戦争の時も国学が悪用され、冒涇され、曲解された歴史もあるので、一言で「国学は国粹主義でもナショナリズムでもない」と言うのは難しいが、ただ、宣長の言っていることの原点に立ち返って考えてみる必要があるではなかろうか。そうすることで、国際化、グローバル化というこの時世、あるいは御代替わりというこの時期において、宣長の思想というものが明日への指針になるのではないか。



宣長は、数多くの和歌を遺しており、その中の一首を紹介する。

しき嶋のやまどごゝろをひととはゞ



「本居宣長六十一歳自画自賛像」  
出典：本居宣長記念館

この歌は、宣長の六十一歳自画自賛像に賛として書かれている。

賛の全文は、

「これは宣長六十一寛政の二とせといふ年の秋八月にてづからうつしたるおのがゝたなり筆のついでに、

しき嶋のやまどごゝろを人とはゞ朝日にゝほふ山ざくら花」

歌は、画像でお前の姿形はわかったが、では心について尋ねたい、と言う質問があったことを想定している。宣長は答える。

「日本人である私の心とは、朝日に照り輝く山桜の美しさを知る、その麗しさに感動する、そのような心です。」

つまり一般論としての「大和心」を述べたのではなく、どこまでも宣長自身の心なのである。だからこの歌は家集『鈴屋集』にも載せられなかった。たとえ個人の歌集であっても、外の歌に埋没したり、作者から離されてしまうことをおそれたのであろう。

独立した歌として、もとめられれば、半切にも書いた。

また画像と一緒にならなおさら結構と、だから、たとえば吉川義信の描く画像などにはこの歌が書かれた。

この歌は宣長の心の歌だった。

(出典：本居宣長記念館)

## 質疑応答

- Q1 「もののあはれを知る」ことは『源氏物語』から導き出されたのか
- Q2 宣長は「もののあはれ」に女性的なものを見出したのか
- Q3 『源氏物語』と国学の登場にはナショナリズムの時代背景があったのか
- Q4 外来思想を受け入れた中で日本はどうあり続けたのか
- Q5 国学には乱世を治世に引き戻す力があるのか
- Q6 子どもに「もののあはれ」をどのように教えたらよいのか

### Q1 「もののあはれを知る」ことは『源氏物語』から導き出されたのか

「もののあはれ」については、ものの本質を知る、あるいは物でも人でも、それに寄り添うことによって本質を知ることではないかと解釈している。それと同時に、今でこそ扁桃腺と海馬と前頭葉でサイクリックにもものの本質を掴むことが知られるようになったが、200年前からすでに感覚→認識→感情のメカニズムという、似たような論理構成をとっていたことに驚く。

そこで、『紫文要領』の資料に「儒仏批判」等いろいろな言葉が書かれているが、これは本居宣長が『源氏物語』を読んで文脈から読み取ったものなのか、あるいはそれを参考にして自分の思想を構築したものなのか。紫式部がこういうことを思って書いたとは考え難いのでそれに関する見解を伺いたい。

(田中)

本居宣長は「もののあはれを知る」ことが紫式部の意図であると書いているので、宣長自身はそうに確信していた。宣長は『源氏物語』を読んでそのような考え方を導き出したのかという質問だが、『紫文要領』に「あはれ」という言葉が出てくる。『源氏物語』の用例をつぶさに観察し、文脈を捉えてどのような用法で使われているかを考えた上で、そこから導き出された帰納的な結論であるという論理構成で書いている。つまり、現代で言うところの客観的に実証していく形で証明しているので、あたかも我々はこれを読むと『源氏物語』の中にその考え方が内在しているかのように捉えがちである。そういう側面もあるが、まずは儒仏の因果応報説や教誡説等、様々な学説があるので、そういう儒教や仏教の学説を批判するところから捻出してきたものと考えられる。

したがって、作品から立ち上がってくるものをそのまま掬い上げたというよりも、儒教や仏教の先行説を批判する中で見つけたものを演繹的に『源氏物語』の用例に当てはめて解釈し、その解釈があまりにも文脈にきちんと沿うような説明をしているので、あたかも『源氏物語』から立ち上がって来たように感じられるのであろう。

## Q2 宣長は「もののあはれ」に女性的なものを見出したのか

本居宣長というと「手弱女振り(たおやめぶり)」という言葉が思い出されるが、『紫文要領』や万葉の研究を通じて「もののあはれ」の中に女性的なものを見出していたのか。

(田中)

「手弱女振り」の「手弱女」はか弱い女性の意味で「振り」は「風」を「ふり」と読んだように要は「女性風」ということである。それに対する言葉として「益荒男振り(ますらおぶり)」という言葉がある。「手弱女振り」「益荒男振り」という言葉を言い始めたのは、実は宣長の師匠である賀茂真淵である。真淵は『万葉集』は益荒男振りであり、『古今和歌集』は手弱女振りである」と言っているが、紀貫之、藤原定家をはじめとして名立たる歴代の歌人、あるいは歌論・歌学者の中で、そのように歌風を一言で言い表した人はいなかった。つまり真淵が『古今和歌集』と『万葉集』の歌風の違いを一言で言い表して、「『万葉集』はいかつい男が詠んだ強面の歌風であり、『古今和歌集』は女性的な歌風である」と言ったのは画期的なことであった。

そういう点では、もしかすると本居宣長よりも賀茂真淵の方がネーミングセンスは上だったかもしれない。それは単に感覚で決めつけているのではなく、『万葉集』を益荒男振りとする理由として、大和地方、奈良という土地は夏や冬が厳しいので、その厳しい季節を通じて生活していると女性も雄々しくなり、詠まれる歌も益荒男振りになったと説明している。それに対して『古今和歌集』は平安時代に京都、山城の地で、宮廷文化という女性的な文化の中で作られた。そのため春や秋という穏やかな季節感の中で暮らしていたことから、男性が詠む歌も女性的になったと賀茂真淵は言っている。これはかなり説得力がある。現在で言う、人文地理学的な観点からその時代、その土地で作られた歌風を説明するというセンスを持ち合わせている。

その手弱女振りと『源氏物語』から本居宣長が抽出した「もののあはれを知る」説とは基本的に全く別物である。確かに似ていると言えれば似ているが、端的に言うと賀茂真淵は「『古今和歌集』は手弱女振り」と言い、本居宣長は「『源氏物語』はもののあはれである」と言っており、そういう意味では、『古今和歌集』も『源氏物語』も平安時代に京都で生まれた平安朝の文学なので、当然、共通の土台はある。

## Q3 『源氏物語』と国学の登場にはナショナリズムの時代背景があったのか

『源氏物語』が登場したのは遣唐使が廃止され、唐の勢いがなくなった国風文化隆盛の時で、そこにナショナリズム的なものが出てきた。本居宣長が国学を始めたのもロシアや中国等の外国船が我が国の領海を侵犯するという状況に呼応したものと考えられる。そう考えた方が、後の平田篤胤等の流れを見ると自然だと考えられるがどうか。

(田中)

『源氏物語』が書かれたのは平安時代中期で、確かに遣唐使が廃止されて 100 年くらい経った国風文化の時代だった。それに対して江戸時代は、鎖国をしていた時代である。そ

ういう意味では、平安時代と江戸時代は泰平が長く続いた治世だった。乱世と治世は交互に現れるが、平安時代は長らく平和が続いた治世であり、江戸時代も治世の時代だったという点で、外国との関係という意味でよく似たパラレルな関係にある。

外国船の出没については、寛政年間（1789～1801年）にロシア船が来たり、大黒屋光太夫がロシアに行ったりという出来事があったが、もっと後の文政年間（1818～1831年）の1825年に異国船打払令が出された頃、ようやく外国からの脅威を認識しているに過ぎない。例えば寛政年間に林子平が『海国兵談』を書いているのはかなり特異で、宣長が60代を迎えた寛政年間に異国船からの脅威があったから宣長がナショナリズム的な考え方に走ったというのは考え難い。

#### Q4 外来思想を受け入れた中で日本はどうあり続けたのか

日本は縄文時代から神代文字があり、そこに儒教が入り、漢字が入り、また蘭学が入り、英語が入りという状況があつて、その度に日本は激動の時代を遣り過ごしてきた。奇しくも新元号の「令和」に対して皇太子（現「上皇」）が厩戸皇子のことを引き合いに出されたが、そういうことも含めて、今後、日本の神道はどうなるのか。また「もののあはれ」と言いながら外国の思想を受け入れていると周りから蔑まれる事態になりかねない。これまでも戦後、GHQ等に左右されて日本の歴史を曲げられてきたような気がする。それに関して先生はどのようにお考えになっているか。

（田中）

神代文字については、日本の文字である仮名文字が漢字を借りて日本語を表すところから生まれたという定説に対して、平田篤胤が「日本には漢字が入る前から文字があった」と主張し、その実証として神代文字を復元したことになっているが、あれは明らかな平田篤胤の捏造である。平田篤胤は文字だけではなく、歴史書も捏造している。『日本書紀』『古事記』『旧事記』と言われるような正史、歴史書等を継ぎ接ぎにして都合の良いように組み立てて『古史成文』を作っているが、恐らくその論理と同じで、元々あったものではなく、完全に無いものを作り上げた捏造である。

したがって、現代の通説、定説として、儒教と共に漢籍によって日本に漢字が入り、それを借りて、万葉集の時代に万葉仮名で日本語が表記されるようになったと言われている。『古事記』にも万葉仮名的な大和言葉が漢字を利用して記述されており、それが始まりではないかと考えられている。

それから、厩戸皇子＝聖徳太子と言えば十七条憲法だが、これは現在の憲法とは少し違う教えや心得のようなものである。その中で聖徳太子は「篤敬三寶。三寶者仏法僧也。」と言っている。これは聖徳太子が仏教を国家鎮護の手段として用いたということであり、必ずしも皇室の系譜に当たる人が外来の思想を排斥したとは言えないと考えられる。

皇學館大学は神道を基盤とした日本に二つしかない大学の一つで、もう一つは東京の國學院大學だ。右傾化した人ばかりの大学とみられているが、実際はそういうことはなく、

神道は非常に懐が深い。一神教と違って八百万の神＝数多の神が存在し、すべてを神として「人も死ねば神になる」と教えている。宣長自身も「キツネも虫も神だ」という意味の歌を詠んだほどである。そういう意味では、神道自身には外国思想や宗教、あるいは外国文化を受け入れる土壌がある。だからこそ漢籍＝儒教、天竺の思想である仏教、明治以降はキリスト教、あるいはイスラム教等あらゆる宗教を入れて、しかもそれを排斥していない。懐の深さがあると考えられる。

#### Q5 国学には乱世を治世に引き戻す力があるのか

『朝目覚めると戦争が始まっていた』という本があるが、これは「太平洋戦争が始まった時に日本人はどのようなことを考えていたか」ということについて様々な証言を集めた本である。それまでの穏やかな時代が戦争によって激変したわけだが、国学は乱世の学としてあるものなのか、治世の学としてあるものなのか。治世の学として戦争を押し止められなかったのか。「もののあはれを知る」説の共感性のような働きができなかったのか。いろいろな人が、戦争が始まった時に「胸のつかえがとれた」「明治維新の時にペリーに開国を迫られて鬱屈した気持ちでいたが、これで世界に冠たる一等国として世界を相手に戦える」と後押ししたい気持ちを述べた中に国学者の名前もあるが、逆の考えの人はいなかったのか。国学は日本の国を乱世から治世に引き戻す力を発揮できるのか。

(田中)

本居宣長の学問を「国学」と言うと宣長に怒られそうだが、国学の性格には二面性がある。一つは「道の学び」という思想的な側面、もう一つは「歌の学び」という文学的な側面である。この二つの側面において、特に先の戦争の時に誤読され、曲解され、利用されたのが「道の学び」で、宣長をはじめとする国学者の思想的な言説を曲解して戦意高揚に用いたところがある。それについて私は『本居宣長の東亜戦争』という著書の中で、国学の中に好戦的な性質はなく、それを後世で利用する者がいただけであることを立証した。

そういうことから、子安宣邦は昭和から平成への御代替わりの時期に「宣長問題」を取り上げて「本居宣長は危機の時代に蘇る」と言ったが、このテーゼは大学の教員として採点すると50点である。つまり、一面では合っているが、一面では間違っている。合っている部分としては、確かに幕末と太平洋戦争の危機的時期に国学、特に宣長がもてはやされたのは事実だが、それは本居宣長の「道の学び」に関する側面のみが取り上げられただけである。では、外国からの脅威もない戦争もしていない治世の時に国学がどう扱われていたかという「歌の学び」つまり文学論として扱われていた。文学の方がクローズアップされて出ていたわけである。

このように宣長国学は「道の学び」という思想的な側面、分かりやすいよう誤解を恐れずに言えば右翼的な考え方と、それとは一切関係ない、物語を解釈し、和歌を詠むという文学的な研究の面がある。「双面神」のどちらの顔が前面に出てくるかということである。恐らく平和な治世の中においては国学の文学的な側面がクローズアップされ、子安宣邦が

言う危機の時代には思想的な、有り体に言えば右翼的な顔が向けられるという、ヤヌス的な性格があることの現れであろう。

戦時中や幕末において、その時代の人々が危機の時代に蘇った宣長の性質を曲解して自分の文脈に都合よく取り込んで使ったために、一面ではそういう記憶が残って、国学は偏狭なナショナリズム、パトリオティズムというレッテルが未だに剥がれないところがある。

質問は、乱世において平和的なものを主張することができないかということだが、乱世では声の大きな者が強いので、一人でも多く正しい解釈を知った上で、間違った解釈に惑わされないようにするところから始めるしかない。千里の道も一歩からと考えられる。

#### Q6 子どもに「もののあはれ」をどのように教えたらよいのか

小学生の子どもに「もののあはれ」を教えるとしたら、どのように教えればよいのか。

(田中)

神戸大学の教育学部に浜本純逸という国語教育の先生がおられた。その方が『「もののあはれを知る」心を育てる文学教育』という本を出されており、国語教育にも「もののあはれを知る」という考え方は応用できると言われている。作品の主人公の立場に立って物語を読むと、主人公が感じたように感じ、行動したように行動したような共感が生まれる。そこで、例えば男の子には男性のヒーローが主人公の小説を読ませて、主人公の目線でものを感じるという読み方を勧めたらよいのではないか。女の子には女の子が主人公の小説を勧める。これは小説や物語だけではなく、アニメでも漫画でもよいと思う。感情移入をしながらその立場で筋を追っていくと追体験ができる。その追体験が「もののあはれを知る」心を育てていく。

## 良質な知性に触れて未来を見通す眼を養おう

四十年前、私は大学入試に失敗し、予備校で浪人生活を送りました。高校では文系のクラスに所属していたので、現役時代は経済学部を受験しましたが、幸い将来を決める猶予を得て文学部に進路を変更しました。もし現役で大学に入学していたら、文学研究に取り組む、今の自分はありませんでした。人生には、ひたすら走り続ける時期と、立ち止まって佇み、自省する時期とがあります。どちらも大切な人生の一齣です。

人は駆け足で目的地に向かっている時には、まわりの風景も目に入らず、目的地に着いてから何をするかも見えません。目的地に着くこと自体が目的となっているからです。むしろ目的を持つことはよいことです。目的があることによって、やりがい生まれ、それが生きがいにつながることもあるからです。ですが、時には立ち止まって空を見上げたり、視線を落として自分の立ち位置を確認したりすることも必要です。立ち止まるというのは単なる比喩で、実際にはせわしない日常を送る上で、暇を見付けて本を読んだり、思索に耽ったりすることを意味します。

心に余裕ができた時、過去の偉人たちに学ぶことは、非常に有意義です。先人の残した言葉に耳を澄ませ、先人に寄り添って考えることによって、これまでの自分を振り返り、今の自分を確認し、これからの自分の行く末を思い描くことができます。偉人というと、完全無欠の人格者という先入観があるかもしれませんが、実際に知ってみると、案外人間くさく、それゆえに魅力的な人柄であったりします。

このセミナーで私が担当するのは本居宣長（1730～1801）、近世中期の国学者です。『古事記伝』をはじめとして、日本文学や日本文化、日本思想に対して、とてつもなく大きな業績を残しました。現代の日本学のルーツは本居宣長にあると言っても過言ではありません。今から三百年近く前の人ですが、その物の考え方は現代にも通用し、はるか未来をも見据えていると言ってよいでしょう。

次代を切り拓き、新しい時代を担う君たちには、良質な知性に触れる機会を持ち、これからの未来を見通す眼を養ってもらいたいと思います。







大よそ此物語五十四帖は、物のあはれをしようと云ふ一言にてつきぬべし。その物の哀といふ事の味は、右にも段々いふごとく也。猶くはしくいはゞ、世中にありとしある事のさまぐを、目に見るにつけ耳にきくにつけ、身にふるゝにつけて、其よろづの事を心にあぢはへて、そのよろづの事の心をわが心にわきまへしる、是事の心をしる也、物の心をしる也、物の哀をしる也。其中にも猶くはしくわけていはゞ、わきまへしる所は、物の心事の心をしるといふもの也。わきまへしりて、其しなにしたがひて感ずる所が物のあはれ也。たとへばいみじくめでたき桜の盛にさきたるを見て、めでたき花と見るは物の心を知る也。めでたき花といふ事をわきまへしりて、さてくめでたき花かなと思ふが感ずる也。是即物の哀也。然るにいかほどめでたき花を見てもめでたき花と思はぬは、物の心しらぬ也。さやうの人ぞ、ましてめでたき花かなと感ずる事はなき也。是物の哀しらぬ也。又人のおもきうれへにあひて、いたくかなしむを見聞て、さこそかなしからめとをしはかるは、かなしかるべき事をしるゆへ也。是事の心をしる也。そのかなしかるべき事の心をしりて、さこそかなしからむと、わが心にもをしはかりて感ずるが物の哀也。そのかなしかるべきいはれをするとき、感ぜじと思ひけちても、自然としのびがたき心有て、いや共感せねばならぬやうになる、是人情也。物の哀しらぬ人は何共思はず。其かなしかるべき事の心をわきまへぬ故に、いか程人のかなしむを見ても聞ても、わが心にはすこしもあづからぬ故に、さこそ感ずる心なし。是等はたゞ一ツ一ツをあぐる也。是に准じて、よろづの事の物の哀といふ事を知べし。

【認識論】

【共感論】

## 資料2

### 本居宣長『紫文要領』(宝暦十三年)

此物語の大意、古来の諸抄にさまざまの説あれ共、式部が本意にかなひがたし。凡此物語を論ずるに、異国の儒仏の書をもて、かれこれいふはあたらず事也。異国の書とは大きに類のことなるもの也。自然に義理の符合する事はあれ共、それはそれ也。何の書によりてかく、かの文にならひて作るなどいふ事、みなあたらす。式部が意にたがへり。まへにもいへることく、我国には物語といふ一体の書有て、他の儒仏百家の書とは、又全体類のことなる物也。さてその物語といふ物は、いかなる事をかきて、何のためにみる物ぞといふに、世にありとあるよき事あしき事、めづらしき事おもしろきこと、おかしき事あはれることさまざまを、しどけなく女もじにかきて、その絵をかきまじへなどして、つれづれのなぐさめにより、又は心のむすぼれて物思はしきときのまぎらはしなどにするもの也。その中に歌のおほき事は国の風にして、心をのぶるものなれば、歌によりてその事の心も深く聞え、今一きは哀とみゆるものなれば也。さていづれの物語にも、男女のなからひの事のみおほきは、集共に恋の歌のおほきとおなじことにて、人の情の深くかゝること、恋にまさることなき故也。

【儒仏批判】

【物語論】

【恋愛論】

(中略)

れども、近き世となりては、皇國のをもはらとするとながらもおほかれれば、からぶみ學びをば、分て漢學儒學といひて、此皇國のをこそ、うけばりてたゞに學問とはいふべきなれ、佛學なども、他よりは分て佛學といへども、法師のともは、それをなむたゞに學問とはいひて、佛學とはいはざる、これ然るべきことわり也、國學といへば、尊ぶかたにもとりなざるべけれど、國の字も事にこそよれ、なほうけばらぬいひざまなり、世の人の物いひさま、すべてかゝる詞に、内外のわきまへをしらず、外國を内になしたる言のみ常に多かるは、からぶみをのみよみなれたるからの、ひがことなりかし、

からごころ 二言

漢意とは、漢國のふりを好み、かの國をたふとぶのみをいふにあらず、大かた世の人の、萬の事の善惡是非を論ひ、物の理をさだめいふたくひ、すべてみな漢籍の趣なるをいふ也、さるはからぶみをよみたる人のみ、然るにはあらず、書といふ物一つも見たることなき者までも、同じこと也、そもからぶみをよまぬ人は、さる心にはあるまじきわざなれども、何わざも漢國をよしとして、かれをまねぶ世のならひ、千年にもあまりぬれば、おのづからその意、世中にゆきわたりて、人の心の底にそみつきて、つねの地となれる故に、我はからごころもたらずと思ひ、これはから意にあらず、當然、理也と思ふことも、なほ漢意をはなれがたきならひぞかし、そもく人の心は、皇國も外つ國も、ことなることなく、善惡是非に二つなければ、別に漢意といふこと、あるべくもあらずと思ふは、一わたりさることのやうなれど、然思ふもやがてからごころなれば、とにかくに此意は、のぞこりがたき物になむ有ける、人の心の、いづれの國もことなることなきは、本のまごころこそあれ、からぶみにいへるおもむきは、皆かの國人のこちたきさかしら心もて、いつはりかざりたる事のみ多ければ、眞心にあらず、かれが是とする事、實の是にはあらず、非とすること、まことの非にあらざるたくひもおほかれれば、善惡是非に二つなしともいふべからず、又當然之理とおもひとりたるすぢも、漢意の當然之理にこそあれ、實の當然之理にはあらざること多し、大かたこれらの事、古き書の趣をよくえて、漢意といふ物をさとりぬれば、おのづからいとよく分るゝを、おしなべて世の人の心の地、みなから意なるがゆゑに、それをはなれて、さとすることの、いとかたきぞかし、

【漢意】

### 資料3

#### 本居宣長『玉勝間』(寛政六年)

もろこしづみをもよむべき事 〔三〕

から國の書をも、いとまのひまには、ずのぶんに見るぞよき、漢籍も見ざれば、其外國のふりのあしき事もしられず、又古書はみな漢文もて書たれば、かの國ぶりの文もしらでは、學問もことゆきがたければ也、かの國ぶりの、よろづにあしきことをよくきとりて、皇國だましひだにつよくして、うごかされば、よるひるからぶみを見ても、心はまよふことなし、然れども、かの國ぶりとして、人の心さかしく、何事も理をつくしたるやうに、こまかに論ひ、よさまに説なせる故に、それを見れば、かしこき人も、おのづから心うつりやすく、まどひやすきならひなれば、から書見むには、つねに此ことをわするまじきなり、

學問して道をしる事 〔三〕

がくもんして道をしらむとならば、まづ漢意をきよくのぞきさるべし、から意の清くのぞくらぬほどは、いかに古書をよみても考へても、古の意はしりがたく、古のころをしらでは、道はしりがたきわざになむ有ける、そもく道は、もと學問をして知ることにはあらず、生れながらの眞心なるぞ、道には有ける、眞心とは、よくもあしくも、うまれつきたるまゝの心をいふ、然るに後の世の人は、おしなべてかの漢意にのみうつりて、眞心をばうしなひはてたれば、今は學問せざれば、道をえしらざるにこそあれ、

がくもん 〔三〕

世中に學問といふは、からぶみまなびの事にて、皇國の古をまなぶをば、分て神學倭學國學などいふなるは、例のから國をむねとして、御國をかたはらになせるいひさまにて、いとくあるまじきことなれ共、いたしへはたとから書學びのみこそ有けれ、御國の學びとは、もはらとする者はなかりしかば、おのづから然いひならふべき勢ひ也、しかはあ

【漢籍】

【學問】

【國學?】

2024（令和6）年1月20日制作

監 修 田中 康二

編集・制作 公益財団法人国際高等研究所  
I I A S 塾「ジュニアセミナー」開催委員会

ISSN 2759-0585



満月に照らされて浮かぶ「ゲート」の胸像  
(国際高等研究所庭園)